

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 8 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25360006

研究課題名(和文) ベトナム戦争のオーラル・ヒストリーと「戦争の記憶」に関する複合的研究

研究課題名(英文) Dual studies on Oral History of Vietnam War and Memories of Vietnam War in Vietnam

研究代表者

今井 昭夫 (Imai, Akio)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：20203284

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：ベトナム国内で退役軍人・元青年突撃隊隊員に戦争体験について聞き取り調査を実施した。北部山間部のトゥエンクアン省、南端のカマウ省といった僻地、韓国軍の駐屯地だったビンディン省、それから知識人層を中心にハノイ市とホーチミン市においてである。カマウ省では40年代から一貫して解放勢力側の基地が存続していたことが確認できた。ビンディン省では韓国軍による虐殺の記憶について確認することができたが、いわゆる「ライダイハン」問題はそれほど大きな問題になっていないと感じた。ホーチミン市での聞き取り調査では、北部の退役軍人会や青年突撃隊とのありようの違いが浮き彫りになった。ハノイでは学徒出陣兵の調査を行なった。

研究成果の概要(英文)：In Vietnam I interviewed veterans and former volunteer youth members about their war experiences. I conducted interviews in Tuyen Quang province in the northern mountainous region, Ca Mau province in the southern end, Binh Dinh province stationed by the South Korean army, and Hanoi city and Ho Chi Minh city targeting mainly intellectuals. In Ca Mau province, it was confirmed that the base of the liberation side consistently existed since the 1940's. In Binh Dinh province, I was able to confirm about the memories of massacres by the South Korean army, but I felt that the problem of so-called Lai Dai Han is not that big problem. Interviews in Ho Chi Minh city highlighted the differences in the veterans' association and the youth volunteers in the north. In Hanoi, I interviewed former student soldiers.

研究分野：ベトナム地域研究

キーワード：ベトナム ベトナム戦争 戦争の記憶 オーラルヒストリー ベトナム近現代史

1. 研究開始当初の背景

これまでに膨大な数のベトナム戦争研究が、ベトナム国内外において刊行されている。私見によれば、ベトナム戦争に関する従来の研究は大きくは2つに分けられる。1つは戦史、軍事史、部隊史である。もう1つはベトナム戦争をめぐる関係国政府の政策決定過程を主に扱う政策史、外交史、国際関係史である。ベトナム国内のベトナム戦争通史の代表的なものは国防省軍事史研究所編『ベトナム人民軍隊史 1944 - 1975 年』(2005 年)やホアン・ヴァン・タイ、チャン・ヴァン・クアン等編『30 年戦争』(2001 年)などが挙げられるが、以上の研究ではいずれも大局的・俯瞰的なベトナム戦争像は描かれているが、「下からの視線」の研究では必ずしもなく、「人民戦争」性がまだ十分に描き切れていないのではないかと思われる。

本科研は申請者がこれまで実施してきたほぼ同一研究テーマの基盤研究 C「ベトナム戦争後のベトナムにおける戦争の記憶の総合的研究」(平成 16~19 年)と基盤研究 C「ベトナム国内での聞き取り調査によるベトナム戦争の記憶に関する研究」(平成 20~24 年)(いずれも研究代表者は今井昭夫)の研究を継承・発展させるものとして企図された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ベトナム国内でのベトナム戦争に関する聞き取り調査から得られた「証言」と「記憶」をもとに、オーラル・ヒストリーの手法により新たなベトナム戦争像を描き出すことである。本研究では「低い位置の視線」からベトナム戦争を歴史的に再検討し、現在の共産党支配国家体制が戦争への動員と参加の中から生成されてきたことを明らかにする。次にベトナム戦争後のベトナムにおける「戦争の記憶」やコメモレーションを研究対象に扱い、現代ベトナム社会におけるベトナム戦争の影響の諸相を具体的に提示するとともに、世界の「戦争の記憶」の中の一類型としての位置づけを検討する。これらにより、現代ベトナム地域研究や「戦争の記憶」・「想起の文化」研究一般に学術的に貢献しうる複合的研究を目指す。

別言すれば、軍事史や外交史・国際政治史からの視角ではなく、いわば戦争の社会史的視角から、ふつうのベトナム人の戦争体験や戦争の記憶からベトナム戦争を捉えなおそうとするものである。

3. 研究の方法

ベトナム国内の退役軍人や元青年突撃隊隊員を対象とした聞き取り調査をもとにオーラルヒストリーを紡いでいくとともに、回想記や文芸作品などを総合して「ベトナムの普通のひとびとのベトナム戦争史」を組み立

てていく。

ベトナム国内では、高級軍人のベトナム戦争回想記や一般の人々の体験記集はたくさん出版されているが、ベトナム戦争のオーラル・ヒストリー研究はまだあまり成果が出されていない。ベトナム国外、とくに英語圏におけるオーラル・ヒストリー研究は、大半は戦時中の米軍による捕虜・逃亡兵の「ベトコン」に対する尋問記録に基づくもので、地域的にもメコンデルタを主な調査地としている。カレン・ゴッツチャン・ターナーとファン・ティン・ハオの『女性でさえ戦わなければならない 北ベトナムからの戦争の記憶』(1998 年)は、戦後のベトナム国内での聞き取り調査に基づくが、対象が北ベトナム女性兵士に限られている。全国規模で、さまざまな戦士(男女、士官と一般兵士、兵種)を対象にした、近年のベトナム国内での聞き取り調査に基づく研究は殆どない。この研究状況は日本でも同様であり、本研究はその研究上の空白を埋めようとするものである。

1990 年代以降、ベトナム国内におけるベトナム戦争の「記憶」や「表象」を扱う研究も出てくるようになった。これらの研究では、ドイモイの副産物として戦争のコメモレーションが勃興し、国際経済参入に合わせた「戦争の記憶」が求められるようになり、戦争英雄主義の国家英雄崇拜(ナショナル・メモリー)から地方化された祖先崇拜(ローカル・メモリー)へと関心が移行しているとの指摘がなされている。申請者のこれまでの調査では、1990 年代以降、国家の側から新しいコメモレーションが出される一方、人々の側からも新しい追悼の仕方や戦死者へのアプローチが登場してきており、「ナショナル」と「ローカル」の双方においてコメモレーションは多様化・多義化し、相互補完的になっている。本研究は、そのような想定のもとに、「戦争の記憶」の「社会化」の諸相をより明らかにし、先行研究の補完をしようとするものである。

4. 研究成果

平成 25 年度は 3 か所において聞き取り調査を実施した。カマウ省はベトナム最南端の省であり、サイゴン(現ホーチミン市)から遠く南ベトナム政権の影響が及びにくいということもあり、解放勢力側が 1940 年代後半から一貫して強い地盤を築いていた地方である。後にベトナム共産党の最高幹部となるレ・ズアン、レ・ドゥック・ト、ファム・フンなども 50 年代なかばまで当地で活動していた。その足跡をたどることができた。トゥエンクアン省はハノイの北西方向の山間部に位置する省で、45 年以降に移住してきたキン族が多くおり、ここからディエンピエンフーの戦いに動員された人々もいた。奇遇だったのは、75 年 4 月 30 日に旧南ベトナム大統領官邸に一番最初に突入した戦車の乗

員に聞き取り調査ができたことである。戦後、戦争の功績をめぐる論争になることはよくあり、彼の場合もそうした「記憶の抗争」の一事例であった。ホーチミン市では、他の場所のように退役軍人会のつてを頼って聞き取り調査をすることができなかった。このことを見ても、ホーチミン市の退役軍人会がハノイの退役軍人会とは異なる位置づけがされていることが分かる。インタビューした人はいずれも解放勢力側で活動してきた人ばかりであるが、なかには今の共産党について堂々と批判する人もいて驚かされた。解放勢力側の人といっても、南部の人は北部の人とはまた異なった複雑性を抱えていることが改めて認識させられた。平成 25 年度に執筆した論考は、1972 年のハノイのクリスマス爆撃の被災者、戦争捕虜だった人々、そして中部の激戦地だったクアンチ省退役軍人と元青年突撃隊隊員の戦争の記憶についてまとめた。前者 2 つは「戦争の記憶の社会化」といった観点から考察を試みた。

平成 26 年度は 2 回のベトナム国内での聞き取り調査を行なった。第 1 回目はホーチミン市とハノイ市で実施した。ホーチミン市では、同市の元青年突撃隊隊員会の斡旋で、元隊員 8 人（全員女性）にインタビューした。北部の青年突撃隊と比べて、同市の青年突撃隊は次のような特徴があることが分かった。

多数、多様、長期。カンボジア戦争にも参加。大きな農場建設にも参加。同市郊外のクチ県でおこなった調査では、当地の解放区では独自の通貨がなく、サイゴン政権の通貨を使っていたほか、北部から二セ通貨を運び込んでいた。米は現地で調達し、武器はサイゴン政府軍兵士から購入することもあったという。ハノイ市では退役軍人会の活動が比較的活発であるが、ホーチミン市ではそうではなく、むしろ抑制されている面があり、退役軍人をめぐっては複雑な面があることが窺えた。第 2 回目は、ハノイ市で実施し、主たる対象は、旧ハノイ総合大学（現在の人文社会科学大学と自然科学大学）の学徒出陣兵だった人である。今回は自然科学系の元学徒出陣兵 6 人にインタビューした。北部では、1970～72 年に学徒兵が動員されるようになり、それは学部を問わず動員されたことが分かった。第二次大戦時の日本と比べると、文理の区別があまりなかったようである。この年は、ベトナム戦争の記憶を含む、ベトナム近現代史を理解するのに非常に有益な大河小説、ホアン・ミン・トゥオン著『神々の時代』の翻訳に取り組んだ。

平成 27 年度の聞き取り調査は、ベトナム中部のビンディン省で実施した。ここはベトナム戦争中、韓国軍が駐留していたことで有名で、それにまつわる虐殺記念碑なども多く存在する。韓国軍に対する現地退役軍人の印象は、予想通り、「非常におそろしかった」というものであった。韓国人男性とベトナム人女性の混血児「ライダイハン」の数はそれ

ほど多くないとのことであった。当時、解放勢力側の駐屯地に、韓国軍の戦闘ぶりを視察するために北朝鮮軍士官が来ていたとの情報は耳新しかった。平成 26 年度の論考としてはエッセー「ベトナム戦争と女性」（『女性史学』第 25 号）を発表した。本科研でこれまでに行なってきた聞き取り調査のなかで、女性からの聞き取り調査の成果を反映したものである。抗仏・抗米の戦争中、傷痕軍人との結婚を奨励される運動があったこと、抵米戦争になると、いっそう女性への動員が高まったこと。それは正規軍人や民兵といった戦闘員ばかりでなく、青年突撃隊という、補給物資の運搬や道路建設などに従事した、女性が約 8 割を占める後方支援組織に顕著に見られること、などを論じた。5 月にはベトナム研究者会議において（於東京大学）ベトナム戦争のオーラル・ヒストリーについて研究報告した。ベトナム戦争を描き、ベトナムにおける新たな戦争の記憶のありかたを示した小説、ホアン・ミン・トゥオン著『神々の時代』を拙訳で東京外国語大学出版会から刊行した。

平成 28 年度は、「知識人と戦争の記憶」を中心に研究を行なった。具体的には、旧ハノイ総合大学などの元学徒出陣兵と文学者へのインタビューを試みた。前者は 8 月にハノイ市にて実施した。このインタビューにより、ベトナム戦争中における北ベトナムでの「学徒出陣」は 1970 年頃から活発になったこと、訓練期間が短くて戦場に投入されたため戦死者の割合が多かったことなどが確認できた。また後者では、作家のホアン・ミン・トゥオン氏、詩人のファム・ドゥック氏、作家のチン・ディン・コイ氏にインタビューした。印象的であったのはコイ氏で、氏の家系はかつて科挙合格者を輩出した名家で、そのためかえて革命後は「履歴が悪い」とされてしまい、コイ氏はその履歴を変えるために、高校で成績優秀であったにもかかわらず、大学に進学せず、高卒で志願して出征したという。「履歴の悪い」家の子弟にとって、戦争で兵士になることは名誉回復のよい手段であったという。ベトナムにおける戦争動員の一つのかたちである。また平成 28 年度は、中越戦争の記憶についても調査した。これはベトナム国内で多く語られる「ベトナム戦争の国記憶」と、あまり語られないあるいはタブー視されている「中越戦争の記憶」を対照して考察するためである。6 月には「戦争と社会主義のメモリースケープ」研究会で「ベトナムにおける社会主義国間の連帯と軌跡の歴史 - 中越戦争の記憶・語りを中心として」と題し、研究発表した。7 月には、1984 年の中越戦争の激戦地であったハーザン省ヴィスエンに行き、ヴィスエン戦線記念館および同県烈士共同墓地を見学した。同墓地には 80 年代に戦死した人が多数埋葬されている。年度末には、ドイモイ以降のベトナムにおける、ベトナム戦争の傷跡と戦争の記憶に

ついてまとめた論考を『アジ研 ワールドトレンド』に発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

今井昭夫「1972年クリスマス爆弾の記憶 - ベトナム・ハノイ市カムティエン通りの被災者への聞き取り調査」『東京外国語大学論集』第86号(225 - 242頁)平成25年7月

今井昭夫「ベトナムにおける戦争の記憶の『社会化』 捕虜となった革命戦士博物館の事例を通して」『地域研究』Vol.14, No2(112 - 125頁)平成26年3月(査読付き)

今井昭夫、村上雄太郎「現代ベトナムにおける漢越語の研究(6)日本人学習者から見た漢越語の声調とその使用に関する諸問題」『東京外大 東南アジア学』第20巻(1 - 9頁)平成27年3月(査読付き)

今井昭夫「書評 伊藤正子『戦争記憶の政治学 韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題と和解への道』平凡社」『東南アジア研究』52巻2号(338 - 340頁)(査読付き)

今井昭夫、村上雄太郎「現代ベトナムにおける漢越語の研究(7)日本人学習者から見た漢越語の名詞的用法の諸問題」『東京外大 東南アジア学』第21巻(15 - 33頁)平成28年3月(査読付き)

今井昭夫「南北統一後40年のベトナム」『歴史地理教育』No.851(4 - 9頁)平成28年6月

今井昭夫「ドイモイ期における戦後処理と戦争の記憶」『アジ研 ワールドトレンド』No.257(8 - 11頁)平成29年2月

[学会発表](計1件)

今井昭夫「ベトナムから見たベトナム戦争」ベトナム研究者会議、平成27年5月、於東京大学教養学部

[図書](計4件)

今井昭夫編集代表・東京外国語大学東南アジア課程編『東南アジアを知るための50章』明石書店、平成26年4月(全450頁)。今井担当分は、今井昭夫「第7章 脱植民地化から国民国家形成へ」(73 - 81頁)と「第8章 ベトナム戦争とその後の社会主義経済体制」(82 - 88頁)

武内房司編『戦争・災害と近代東アジアの民衆宗教』有志舎、平成26年3月(全313

頁)。今井の担当分は、今井昭夫「ホーおじさん教と戦争の記憶 - 近年のベトナム北部の民衆宗教」(290 - 309頁)

濱下武志・平勢隆郎編『中国の歴史 東アジアの周縁から考える』有斐閣、平成27年3月(全349頁)。今井の担当分は、今井昭夫「ベトナム史から見た中国近現代史」(105 - 130頁)

ホアン・ミン・トゥオン著、今井昭夫訳『神々の時代』東京外国語大学出版会、平成28年3月(全569頁)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今井昭夫(Imai Akio)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：20203284

(2) 研究分担者

(なし)

研究者番号：

(3) 連携研究者

(なし)

研究者番号：

(4) 研究協力者

(なし)